

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

LOVERS (十面埋伏)

2004年・中国映画・120分

配給/ワーナー・ブラザース映画

2004 (平成16) 年9月4日鑑賞

<梅田ピカデリー>

Data

監督・製作・原案・脚本: 張藝謀 (チャン・イーモウ)

出演: 金城武 / 劉德華 (アンディ・ラウ) / 章子怡 (チャン・ツイイー) / 宋丹丹 (ソン・タンタン)

👁️👁️ みどころ

今やアジアンビューティーの代表となった章子怡 (チャン・ツイイー) を主役に起用した、張藝謀 (チャン・イーモウ) 監督の『HERO (英雄)』(02年) に続く超大作! 時代設定は、唐の時代末期。官吏VS反政府勢力との闘いの中で生まれるラブストーリーは、原題『十面埋伏』のイメージどおり、多くの伝統と、あっと驚く新事実の連続で、実に面白い。また、美しい映像と(ワイヤー)アクションはさすがだが、所詮CG。韓国映画の『武士 (MUSA)』(01年) の迫力の方が私は好き・・・?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<『十面埋伏』と『LOVERS』、あなたはどちらが好き?>

この映画の中国タイトル『十面埋伏』とは、四方八方に伏兵が潜んでいるという意味で、『三国志演義』の中に登場するもの。すなわちパンフレットによると、曹操が袁紹と一進一退の攻防を続けていたとき、参謀の程昱が曹操に「十面埋伏の計」を授け、袁紹の軍を壊滅状態に陥らせることに成功した、というエピソードによるもの。またパンフレットによると、この映画のタイトル確定はかなり難行し、やっとこれに決まったとのこと。

もっとも、邦題の『LOVERS』は、どういう経緯で決まったのかは全く書かれていない。原題とは全く違うアプローチでつけられたタイトルだが、私はこの方が好き。たしかに、伏線にとんだストーリー展開や、あっと驚くドンデン返しがたくさん仕掛けられているこの映画のタイトルとしては、『十面埋伏』の方が面白いかもしれないが、ややこしいストーリー展開に振り回されないで(?)、激動の時代の中、対立する立場にありながら「純愛」を貫く男女のラブストーリーとして単純に観た場合は、断然『LOVERS』の方がいい。結論として私は、『LOVERS』の方に軍配をあげるが、さてあなたは・・・?

<ストーリー紹介はごく一部だけに。あとはヒミツ・・・>

この映画の舞台は、唐の時代の末期。栄華を誇った唐の時代もかげりをみせ、腐敗政治が広がる中、反政府組織の活動が盛んになっていた。その代表が「飛刀門」一派だが、その組織の実態は容易につかめない。

他方、唐の官吏の金（ジン）（金城武）と劉（リウ）（劉徳華）は、この飛刀門の組織を壊滅させるための活動が続けていた。そんな時、牡丹坊という名の遊郭にいた人気踊り子が飛刀門に関係する重要人物らしいとの情報を得た劉は、金を牡丹坊に客として潜入させ、その踊り子、小妹（章子怡）との接触をはかった。牡丹坊に客として入った金は、女将（宋丹丹）から小妹を紹介され、その見事な踊りに魅了されたうえ、この小妹に乱暴狼藉に及んだから、牡丹坊内は大混乱。そこに現われたのが、唐の役人の劉。劉はこの騒動の責任は、金と小妹の二人にあると結論づけて、二人を逮捕しようとしたが、そこで、女将のとりなしによって、小妹はある踊りを舞うことに。しかし、そこから次の大事件が……。ここまではストーリーを紹介していいものだが、それ以上のストーリー解説はダメ。あとはヒミツ・・・？

<『HERO (英雄)』と『LOVERS』>

『紅いコリヤン』（87年）で監督デビューし、その後10本以上の「これぞ、中国映画！」という映画をすべて大ヒットさせ、数々の賞を獲得してきた張藝謀監督は、『HERO (英雄)』（02年）から本格的にハリウッド進出を果たした。そして、その大ヒットによって、今や世界的巨匠という呼び名が当然のようにになっている。この『HERO (英雄)』は、張藝謀がはじめて挑んだアクション映画だが、そこには張藝謀監督独特の映像美の他、全く新しい試みとしてCG技術を駆使した『マトリックス』ばりのワイヤーアクションが多用された。それによるいくつかの決闘シーンは美しいものの、現実にはありえない、ある意味ではバカバカしいシーンが堂々とスクリーン上で展開されたわけだ。

私がこの『HERO (英雄)』の対極にあると思うのが、韓国映画の『武士 (MUSA)』（01年）。この映画での戦闘シーンや決闘シーンは、ワイヤーアクションなしのため、迫力満点。そして私は、断然こちらの方が好き。この『LOVERS』の映像美とワイヤーアクションの華麗さは『HERO (英雄)』と同じだが、やはり、所詮つくりものという感じを否定することができない。一度だけならOKだが、2度3度と続けられると・・・？

<章子怡はお見事>

この映画の前宣伝では、ヒロインは盲目の踊り子。そして、予告編でも見事な踊りを見せていた章子怡だが、「盲目の美少女」という設定だから、目は全く動かない。そのため、張藝謀監督の『初恋のきた道 (我的父親母親 / The Road Home)』（00年）

で華々しくデビューし、今やアジアンビューティーを代表する女優に成長した章子怡の魅力ももうひとつ・・・。と思っただけで本編を観ると、その踊りのテクニックは実に見事なもの。パンフレットによると、11歳から6年間プロを養成する舞踏学校で学んだとのこと。

さらにすごいのは、盲目の少女ながら、反政府勢力である飛刀門一派から派遣されただけあって、小妹が示す武術の才。彼女の得意技は飛刀技で、これは放った飛刀が敵のものを切り裂いた後にブーメランのように手元へ飛び戻ってくるというもの。さらに、それ以外の刀や棒術でも、小妹は卓越した武術の才を見せる。さらに物語のエンド部分では、口から血を流しながら必死の形相を見せての迫真の演技・・・。

『武士 (MUSA)』での章子怡はお姫様役だったし、『HERO (英雄)』での「飛雪」(張曼玉/マギー・チャン) や「無名」(李連杰/ジェット・リー) との「闘い」では、武術の技量について格の違いが前提となっていたから、章子怡はどちらかというと引き立て役だった。しかしこの『LOVERS』は違う！この映画は、章子怡をヒロインとしてつくられたもの。

章子怡は、盲目の踊り子として見事な踊りを見せ、さらに盲目の武術家として見事な闘いぶりを見せるが、映画の後半はその様相ががらりと変わり、章子怡の本来の魅力がさらに増していく。その顛末を詳しく解説できないのは残念だが・・・。

<登場人物は3人+1人のシンプルなもの>

『HERO (英雄)』は、回想シーンが入ったり、仮定の物語が入ったりしたため、そのストーリーを理解するのは結構大変だったが、この『LOVERS』のストーリーは、色々とひねってあるものの、基本的にはラブストーリー。そして登場人物が、主役の男女3人だけと言ってもいいほど少ないから、わかりやすい。主役の第一は、もちろんヒロインの章子怡で、章子怡の見事さは上述したとおり。他方、男性の主役は金城武と劉徳華の二人。この二人は共に唐の政府の官吏だが、物語の進行につれて、様々な面が・・・。金城武扮する金は官吏ながら「随風」(スイフォン) と名乗って、酒遊び、女遊びをするのがホントに好きそうな男。

これに対して劉徳華扮する劉は、立場は金より上らしく、指示・命令する立場ながら、どこか苦しそう・・・？果たして、どちらが真面目(?)で、どちらが不真面目(?)なのか？また、どちらの小妹に対する想いが本当なのか？予告編やチラシでさかんに語られている、「3つの愛が仕掛けてくる！」とか、「謀」という言葉の意味するものが、この2人の男をめぐる、ドラマティックに展開していく。このようなハラハラ・ドキドキの映画のつくり方はさすが張藝謀監督！

1961年生まれ劉徳華(アンディ・ラウ)と1973年生まれ金城武を比べると、もちろん劉徳華の方が俳優としても先輩だし、活動歴の長さや重さにおいても、張國榮(レスリー・チャン) や梁朝偉(トニー・レオン) らと並ぶものだから断然上。しかし、最近

の金城武の人気沸騰ぶりはすごいもので、この映画では、金城武の方が「いい役」を獲得している。これも時代の流れか・・・？

もう一人の登場人物は牡丹坊の女将の宋丹丹（ソン・タンタン）だが、これがくせ者で、出番は少ないもののストーリー上は重要な役柄。さて、どんな場面で、どんな役柄で登場するのか、注目しながら映画を観てもらいたい。

< 武俠映画と日本の任俠映画 >

張藝謀監督の『HERO（英雄）』で明らかになったのは、張藝謀監督は、もともと武俠小説や武俠映画が大好きだということ。武俠小説、武俠映画の定義づけは難しいが、私の勝手なイメージでは、中国で人気1番の武俠小説といえば、何とんでも『水滸伝』だろう。

これは、明の時代に書かれた「四大奇書」の1つで、汚職官僚たちがはびこる世の中からはじき出されて「アウトロー」となった英雄豪傑たちが梁山泊に結集して、悪政と闘うという物語。この『水滸伝』は、江戸時代の日本に輸入されて人気となり、今でも吉川英治『新・水滸伝』、横山光輝の漫画『水滸伝』や北方謙三の小説『水滸伝』などが大人気で、108人の英雄豪傑たちの正義感あふれる闘いは、血湧き肉躍るもの。私は、これぞ武俠小説の代表と思っている。

もっともパンフレットによると、「武俠とは武術と俠義であり、そのふたつを必要不可欠なファクターとする小説が武俠小説」、また、「主要な登場人物はひとり残らず卓越した武功の持ち主、というのが武俠モノの大前提」とある。この解説がベストかどうかは別として、イメージはこれで十分よくわかる。

これに対して日本では、武俠という言葉よりも任俠と言った方がわかりやすいかも……。そしてその代表は、「清水の次郎長」か・・・？高倉健をはじめとする日本の「ヤクザ」も、任俠道の延長にあるものだが、任俠とヤクザとの間には、「反体制」という意味で共通点があるものの、やはり清水の次郎長の方がホンモノの任俠・・・？

この問題をつきつめていけば、エンドレスの議論になるかもしれないが、とにかく中国の武俠小説、武俠映画の面白さや醍醐味を感じることができなければ、この映画のファンとなることは到底ムリ・・・？

< ワダエミの優美な衣装は絶品モノ！ >

この映画では、見どころは次の4点とはっきりとしている。すなわち、①牡丹坊での小妹の踊り、②逃走中の山林での金、小妹と官吏との闘い、③竹林での金、小妹と飛刀門一派との闘い、④雪原での金と劉の闘い。これらの見どころをよりすばらしいものにしてるのは、その場面ごとに登場する、『HERO（英雄）』と同様のすばらしい張藝謀監督の色彩美とワダエミによる衣装。

パンフレットによると、唐末期の時代の官吏の服装そのものがそれほどはっきりしたものではない。飛刀門一派の衣装などは当然わかるはずがない。そんな、「ゼロからのスタート」の中で、ワダエミが選んだのは、官吏は「敦煌グリーン」という墨緑色を基調としたもので、そのデザインは日本の奈良時代の武官スタイルを参考にしたもの。これに対して飛刀門一派は、その隠れ里が竹林であるため、衣装も竹の緑色で統一し、またデザインも激しいアクションに耐えられるようにした、とのこと。ワダエミによるこの衣装の色とデザインは、『HERO (英雄)』のそれと同様、すばらしい一言。このワダエミは、今後、張藝謀監督になくはならない重要な存在になるのでは、と思われるが・・・。

<ラブシーンはもうひとつ・・・？>

この映画に登場するラブシーンは計3回。1回目は金と章子怡との間だが、中途半端。2回目は劉と章子怡の間。3年ぶりの再会を果たした恋人同士(?)だからうまくいくはずだが、なぜかこれも中途半端・・・？そして3回目は再び金と章子怡の間。これは八方ふさがりの状況の中、やけくそ気味(?)ながら、二人の気持はピッタリ。だから、ラブシーンとしてはベストの状況なのだが・・・。

この3つのラブシーンは、ラブシーンにうるさいスケベオヤジの私から観ると、その出来はもうひとつ・・・？

<私の中国語のお勉強と小妹>

ここ1、2年の間に、すっかり中国映画にハマってしまった私は、最近少しずつながら、中国語のお勉強を始めている。といっても、カセットテープ・MDと教科書による独学で、もっぱら地下鉄、電車、そして、新幹線の中が主な勉強場所。そんな私にとって、この『LOVERS』で章子怡扮する「小妹」という踊り子の名前は、ちゃんと「四声」を合わせた正確な中国語で「シャオ・メイ」と読めるため、今まで以上に親しみが湧いてくるから不思議なもの・・・。これからもっと頑張ってお勉強しなければ・・・。

2004 (平成16) 年9月6日記